



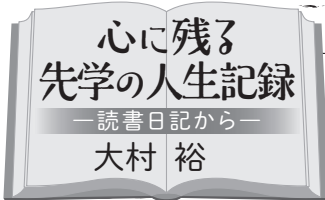
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.239
2023.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第35回

『樋口昇一の軌跡 — 巡り・掘り・語った長野県の考古学 —』

(「樋口昇一の軌跡」刊行会 2012年)

本書は長野県考古学会の重鎮であった樋口昇一氏(1932～2006)の追悼文集である。A4判・ハードカバーで、本文263頁。心の籠った装丁に、関係者の敬慕の念が伝わってくる。

最初に私事にわたる話を書くことをお許し頂きたい。私は樋口氏と直接の面識はないが、2度ほどお見かけしたことはある。一回は寺内隆夫氏(長野県在住の縄文式研究者)の結婚披露宴の席。このときは媒酌人をつとめて居られた。この結婚披露宴は、新郎新婦の同僚たちによる心温まる余興が続き、とても印象深いものであった。もう一回は2004年夏のあるシンポジウムで、樋口氏が会場からコメントをされたときである。奇しくも私は発表者の一人であった。この場で樋口氏と話す機会はなかったのだが、その4日後、分厚い小包が同氏から送られてきた。一体何事だろうと封を開けてみたところ一驚した。そこには、『長野県熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』と、私のくだんの発表に対する過分のお褒めの言葉をしたためた手紙の手紙が入っていたのである。何のゆかりもない後進の学徒に、こうした温かい心配りをするとはなかなか出来ることではない。「樋口昇一」とはそんな研究者であった。

本書は樋口が執筆したエッセイや諸先学への追悼文・学史的論文のほかに、詳細な自らの人生記録、折々に交流のあった人々による回想文、樋口の著作目録などが収載されている。ここでは、「考古学とともに」とタイトルが付けられた、樋口自身が書き留めた人生記録とエッセイを中心に、関係者の回想文等を交えながらその生涯をたどってゆくことにする。

樋口昇一は、1932(昭和7)年1月20日、父・勝次郎、母・イトの次男として東京都江戸川区で出生。生家は酒屋を営んでいたという。1944(昭和19)年、都立江戸川中学校(旧制)入学。在学中、二度の空襲を体験。逃げ惑う樋口等を目掛けて戦闘機グラマンが急降下し、機銃掃射を浴びせられる。戦闘機は、操縦士の顔が見えるまで近づいて来たという。空襲が終わったあと、友人の安否を確かめるために自転車で近所を走っていたとき、裸の死体がゴロゴロと横たわっていたのを目撃し、衝撃を受ける。この戦災体験と敗戦後の政治・社会の激変は、樋口の歴史認識に大きな影響を与えたと想像される。

1948(昭和23)年、國學院大學予科入学。同級生には麻生優・石部正志・椎名仙卓などがいたという。入学前に登呂遺跡の発掘報告会を傍聴したことが契機となったのか、入学早々國學院大學考古学会に入学。この年の7月には早くも静岡県登呂遺跡の発掘に参加し、多くの大学教員や学生たちの知遇を得る。翌年、学制改革により、新制大学一年生となる。同年6月、千葉県銚子市の縄文遺跡・粟島台遺跡の発掘に従事。こうした体験から、麻生優の度重なる説得もあって、国文科から日本史学科に転籍する。以後、在学中は千葉県飛ノ台貝塚、静岡県伊場遺跡、長野県平出遺跡、埼玉県真福寺貝塚、千葉県余山貝塚等、学史に名高

い数々の遺跡発掘に参加している。

1953(昭和28)年、永峯光一・磯崎正彦・小林達雄等の協力を得て、卒業論文「長野県における前期縄文土器の研究」を仕上げ、翌年國學院大學文学部を卒業。卒業後は『信濃史料』(第1巻)の編集補助員として大学に「研究生」として残り、長野県内の各地を踏査・発掘、および個人所蔵資料の調査に従事する。この間、藤森栄一や宮坂英弼の知遇を得る。ちなみにこの仕事が縁となったのか、1956(昭和31)年、長野県立木曾東高校の教諭となり、信州に腰を据えることとなる。新任の高校では、クラス担任・部活顧問の激務の傍ら、『信濃史料』第1巻の編集に忙殺される。このためこの時期には発掘調査に従事することはなかなか叶わなかったが、1957(昭和32)年以降、勤務校のクラブ員を指揮して各地の発掘調査および遺跡踏査を推進する。一方、國學院人脈に連なる著名な研究者たちと柳又遺跡(「ブレ縄文」～縄紋草創期)や杉久保遺跡(「ブレ縄文」)、石小屋洞穴遺跡(縄紋草創期～古墳時代)など学史に残る著名遺跡の発掘を数多く推進している。校務の傍ら、よくもこれだけの野外調査が出来たものと衷心より感服する次第である。その陰には、美代子夫人の深い理解と支援があったことは想像に難くないが、初中等学校教員の研究活動を奨励する信濃教育界の風潮も追い風になっていたのではないかと想像する。樋口は、「戦前の長野県の教育というものは、子供たちに教えるだけではなくて教師自身も学問研究をしていた。昔の先生方は、『自分が学問をしなくて生徒に学問を教えられるのか』とよく言っていました。」と回想している。樋口が私淑していた一志茂樹(長野県内の小学校教員を勤めながら、郷土史研究に尽力した信濃史学会の長老)からも、「お前が学問をやめたら生徒はかわいそうだ。学問をやる姿勢を見せている間は、生徒はお前を信用するけれど、そうでなくなったら駄目だぞ」と訓戒されていたという。そういう気風は、戦後もしばらく残存していたのであった。樋口はまことによき時代に教員生活を送ることが出来た訳である。ちなみに現在の初中等学校の先生方には、過酷な職場環境にめげることなく、どうかこの一志茂樹博士の訓戒を心の片隅に留めて精進して頂きたいと願う次第である。

樋口は発掘調査に活躍するばかりではなく、長野県考古学会の設立に尽力したり、長野県埋蔵文化財センターの幹部として組織づくりや後進の指導にあたりたりして、県内考古学研究のレベルの底上げに尽力。更に考古学の普及、ひいては埋蔵文化財に対する県民の理解をえるべく、精力的に講演活動を展開している。一時長野県の文化課に招聘されるも、上司(埋蔵文化財への意識が乏しい)に「言葉」が通じず、激昂の挙句机を叩く一幕もあり、「1年間でクビとなる」。一方、若い人々には限りなく温かいエールを送っている。私への激励の手紙もその一つなのであろう。まことに樋口昇一先生は根っからの「熱血教師」であった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第35回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第232回)	森山由香里 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第10回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「人口圧と農業 農業成長の諸条件」	通野 健 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第10回)

山本 暉久

10. 大学での考古学 その7

-卒論資料収集旅行② 北海道-

大学生活もあつという間に過ぎて、1968(昭和43)年4月に4年生となった。普通の大学生ならば、就職活動の真っ只中なのだろうが、私は、大学を卒業して一般就職するつもりは全くなく、卒業論文への取り組みが最優先の目標であった。

今回は7月8日~24日にかけて実施した北海道方面の資料収集旅行について振り返ってみたい。幸い、師匠である櫻井清彦先生が、東北・北海道の考古学・古代史に精通されており、北海道在住の研究者との知己も多く、先生を通じて、名刺に紹介状を裏書きしてもらうことができた。当たり前のことだが、いきなりというか、突然資料をみせてくださいと、アポ無しで不意に訪れることは御法度で、事前にいろいろ資料見学をしたいのでご都合はどうでしょうかと、依頼文を出して問い合わせるのだが、それに裏書きされた先生の紹介状の名刺を添えたのである。学生の身分だから、金銭的に余裕などなく、かつかつの旅費で北海道を一周せざるをえなかったのはいうまでもない。だから、宿泊場所もユースホステルを中心に利用することにした。それと、私の兄が、北海道大学・大学院を卒業し、札幌で私立高校の教員をしており、結婚して江別市の大森というところに住んでいたの、兄貴宅を起点として、そこから道内各地に出向くこととした。

7月8日、上野駅発の急行「八甲田」に乗車し、翌日早朝に青森駅に着き、そこから青函連絡船に乗船し、函館に着いたのは、10時過ぎであった。すぐに当時、函館市立博物館に勤務していた吉崎昌一先生を訪ね、立川遺跡の有舌尖頭器や細石器関係の資料を見学した。函館市立博物館訪問後、その日は、函館市湯川にあったユースホステル「北星荘」に宿泊した。なお、所在地・見学場所等は当時のままで記載している。

翌日は、札幌に向かい、北海道大学文学部図書館5階にあった、北方文化研究施設を訪ね、大場利夫・大井晴男先生に面会し、縄文早期の土器等の資料を見学、その日は江別市大森の兄貴宅に宿泊した。翌11日は、北海道大学医学部第二解剖学教室アイヌ標本室を訪れ、所蔵する旧石器資料を見学し、同日も兄貴宅に宿泊した。

12日は、旭川市に向かい、旭川商業高校郷土研究部の顧問をされていた斎藤武一先生を訪ね、所蔵されている北美瑛、旭が丘等の旧石器資料を見学した。その日は、旭川駅前の旅館に宿泊した。13日は、旭川を発ち、名寄に向かい、名寄高校で定時制の教員をされていた山崎博信先生宅を訪ね、名寄日進遺跡篠原

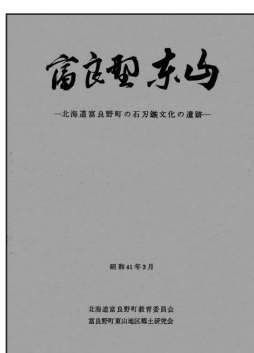
地点やモサンル遺跡などの資料を見学した。この日は、山崎先生のご厚意で、先生宅に宿泊することができた。14日は、名寄から遠軽に向かい、遠間栄治さんが所蔵する白滝遺跡群の膨大な採集資料(私設の「遠軽町郷土資料室」に保管されていた)を見学した。その採集資料の多さにも驚いたが、大形の黒曜石製(赤みの縞を帯びる「十勝石」が特徴)の船

底形石器や巨大な尖頭状石器などが、リング箱に山積みで収納されていることにも驚愕した。この日も遠間さんの勤めで、お宅に宿泊することができた。白滝遺跡群の黒曜石露頭を見学したいと希望を述べたところ、「クマが出るからやめたほうが良い」とのことで、現地に赴くことはあきらめざるをえなかった。

15日も遠間コレクションを午前中見学したあと、北見市に向かい、私の大学の先輩である、北見市教育委員会の久保勝範さんを訪ね、久保さん宅に宿泊したあと、翌日は北見市立郷土博物館所蔵の旧石器資料を見学し、午後は女満別に向かい、女満別町教育委員会所蔵女満別豊里遺跡出土の石刃鎌石器群の資料を見学した。見学後はバスで網走に向かい、網走から常呂町栄浦にある東京大学常呂実習施設で、その当時助手を勤められていた大先輩の菊池徹夫先生(早稲田大学教授)を訪ねた。常呂の到着が、予定より大幅に遅れてしまい、菊池先生の出迎えはないものとあきらめていたら、到着までジープで待っていただいていたのには感激した。その日は、東大常呂研究室で宿泊し、翌日、久保先輩と再び合流し、常呂にまだ埋まり切らない窪地のまま残る竪穴住居址群などを見学した。午後先生たちと別れ、常呂から網走を経由して、6時すぎに釧路に到着し、その日は旅館に宿泊した。翌18日は、釧路市立郷土博物館に沢四郎先生を訪ねた。ここでは、道内の早期土器や東釧路遺跡第二地点、ニツ山遺跡などの早期土器や石刃鎌の資料を見学した。その後、釧路から急行に乗って富良野に向かい、ユースホステル「北野峯温泉ホテル」に宿泊した。スキー場にあるホテルで、ミラーボールで飾られたホールが、なにか季節はずれというか場違いな印象であった。19日、富良野市役所を訪ね、富良野東山遺跡(報告書表紙写真参照)出土の石刃鎌資料を所蔵する公民館で見学した。案内いただいた市役所の職員から、昼にサッポロ味噌ラーメンをご馳走していただいたことが今も強く印象に残っている。午後、富良野から旭川経由で札幌に夜戻り、再び兄貴宅に宿泊した。

20日、札幌から倶知安に向かい、倶知安公民館に所蔵されている峠下遺跡の細石器資料を見学した。当時、「峠下型彫器」などとも呼ばれていた細石刃核を中心とする資料であった。

こうして、ほぼ北海道を一周するようにした資料見学旅行を終え、再び札幌に戻り、23日札幌から函館経由で24日帰京した。かくして、第2回の資料収集旅行は多くの収穫をえて無事終えることができた。なにごと「百聞は一見にしかず」を実感することとなった。



▲富良野東山遺跡報告書表紙

略歴	
1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英式記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 232

徳川大坂城東六甲採石場 ～兵庫県芦屋市

森山 由香里

兵庫県南東部、六甲山地南麓に位置する徳川大坂城東六甲採石場は、元和6(1620)年～寛永6(1629)年に行われた徳川大坂城築城にかかる採石場のひとつで、ここで採石された花崗岩は、徳川大坂城の石垣を構成する石材の約半数を占めると考えられています。今回は、徳川大坂城東六甲採石場のうち、私が勤務する芦屋市内に所在する採石場跡とその関連遺跡について、調査・研究史を中心に紹介します。

市民による発見と分布調査

昭和34(1959)年、大阪城総合学術調査において北・西外濠の石垣から発見された「あしや」の文字刻印は、芦屋市を含む六甲山地での採石活動を示すものと推測されました。しかし、同時の芦屋市域では、市街地で数点の刻印石などが確認されていたのみで、採石場としての詳細は、昭和40年代以降に明らかとなっていきました。

昭和43(1968)年11月10日、歴史研究団体「芦の芽グループ」に所属していた兵庫県立芦屋高校の生徒が、芦屋市奥山の山中(現・奥山刻印群)にて刻印石を発見しました。これ以降、芦の芽グループを中心とした詳細分布調査が継続的に行われ、東六甲の山中・山麓(兵庫県西宮市西部～芦屋市～神戸市東灘区の東端)の東西約6.5kmにわたる範囲に採石場が分布していることが明らかとなりました。

徳川大坂城東六甲採石場は、芦の芽グループらによる調査の成果に基づき、地形や刻印石の分布状況によって、6つのエリア(刻印群)が設定されています。東から順に、甲山刻印群・北山刻印群・越木岩刻印群(西宮市域)、岩ヶ平刻印群(西宮～芦屋市域)、奥山刻印群(芦屋市域)、城山刻印群(芦

屋～神戸市域)と呼称し、芦屋市域では、現在でもこの区分を埋蔵文化財包蔵地の名称として採用しています。

このように、徳川大坂城東六甲採石場の調査研究は、市民の力によって大きく躍進したのです。

発掘調査成果の蓄積

芦屋市域に分布する刻印群のうち、奥山刻印群と城山刻印群は分布域の中心が山林であり、特に奥山刻印群では、現在も山中に良好に残る採石場跡を見学することができます(写真1)。

一方、岩ヶ平刻印群はそのほとんどが市街地化されているため、開発に伴う発掘調査が行われることとなりました。

平成5(1993)年に採石場の発掘調査がはじめて実施されましたが(芦屋市教委1994)、当初の調査は石材を対象とした小規模なものでした。

しかし、2000年代になると、大規模な開発に伴い発掘調査が次々に行われ、面的な調査によって、採石作業に伴う掘立柱建物跡や鍛冶炉跡が発見され、さらに採石方法の分類・検討などが進みました(芦屋市教委2003・2005・2006)。

また、江戸時代の海岸付近に位置する呉川遺跡などでも、徳川大坂城の採石活動に関係する石材がみつかっています。これは、徳川大坂城へ船で石材を運ぶ(浜出し)ための集積場跡と考えられ、これらの発見により、山から海辺へ石材を曳き下ろす(山出し)ルートの検討も進みました。

「残念石」の活用

芦屋市では、発掘調査でみつかった刻印石などを市内の公園などに移設展示しており、これらは、「あしやの残念石」として市民に親しまれています。

芦屋市へお越しの際は、右記二次元コードからご覧いただけるパンフレットを参考に、「あしやの残念石めぐり」を、ぜひお楽しみください。



引用文献:

- 芦屋市教委1994『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 六麓荘町94番地(八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場)』(芦屋市文化財調査報告第25集)
- 芦屋市教委2003『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書—芦屋市六麓荘浄水場高区配水池(水道施設)築造工事に伴う唐津藩採石場跡—』(芦屋市文化財調査報告第44集)
- 芦屋市教委2005『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡—芦屋市岩園町宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前発掘調査の記録と成果—』(芦屋市文化財調査報告第60集)
- 芦屋市教委2006『徳川大坂城東六甲採石場Ⅴ 岩ヶ平刻印群(第85地点)発掘調査報告書—長州藩毛利家石切丁場における発掘調査の成果—』(芦屋市文化財調査報告第61集)

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは木谷智史さんです。



▲写真1 山中に残る採石場跡(奥山刻印群)

考古学者の書棚

「人口圧と農業 農業成長の諸条件」

エステル・ボズラップ 著、安澤秀一・安澤みね 訳／ミネルヴァ書房(1975 改訂1991) ————— 通野 健

本書は、Ester Boserup 1965, The Conditions of Agricultural Growth : The Economics of Agrarian Change under Population Pressure の訳本である。紹介は改訂版を参照した。「人口成長を原因とし食糧生産技術が発展する」という「ボズラップ・モデル」を広めた著作であり、その理論が現在の知見にそのまま適用出来ないとしても、今日でも十分に参照に値する著作であると考え、一読をお勧めするものである。「人口成長は食糧生産技術に制約される(=食糧生産技術の発展を原因とし人口が増加する)」というマルサス的解釈と、それに基づく農業における土地利用の「静的な」捉え方、自律的發展が約束された農業技術観の批判を目的としている。土地利用形態の発展段階論が展開されており、新進化主義や人口圧理論の文脈でプロセス考古学に影響を与えた(後藤明1988「新進化主義人類学とプロセス考古学」『月刊考古学ジャーナル』No.296ニューサイエンス社)。

作付け頻度

ボズラップは、食糧生産における非耕作地と耕作地の区別を無くし、「動的な」土地利用とその形態変化を分析するために、「作付け頻度」という概念を導入する。すなわち土地の耕作期間と休耕期間の両存在、それらの長さの変化を考慮することにより、土地の肥沃性を、一次的(非弾力的)なものとして、持続循環的かつ粗放-集約性の度合いで産出高が変化する、柔軟なものとする。そして、土地利用の集約度が進行していく順序で、土地利用形態を以下の5つの類型に分けて提示する。**1森林休耕耕作**: 耕作期間1、2年。休耕期間20~25年、その土地がもとの森林に戻るまで休耕され、その森林は「二次森林」として、一次林や処女林とは区別される。**2藪地休耕耕作**: 耕作期間1、2年のケースや6~8年まで様々。休耕期間6~10年。1と区別せず長期休耕耕作または移動耕作と呼ばれることが多い。**3短期休耕耕作**: 休耕期間1、2年 休耕地に侵入出来る植物は雑草のみ。**4一毛作**: 休耕期間数ヶ月間。輪作システム含む。**5多毛作**: 休耕期間短いかほとんど無い。同じ耕地で毎年2回以上収穫が行われる。また、当時のヨーロッパでの考古学の成果も参照しながら、これら1~5の序列-粗放的土地利用形態から集約的土地利用形態へが農業発展の典型的序列であるとする。

ボズラップは、自律的に変化すると考えられがちな農業技術(例えば耕作手段や施肥)の変化は、上記の土地利用形態の変化と相互依存しているとする。森林休耕から短期休耕へ、掘棒から犁への変化を具体例に出し、農業技術の変化は土地利用形態が次段階に置換し、新たな追加労働が必要になる場合や耕地の環境が変化する場合に起こることを示す。

労働生産性と人口圧

ところで、上述の発展段階の中でもし仮に、単に集約的土地利用システムに移行しさえすればより高い生産性が得られるのであれば、人口増加を経験しなくても、そのシステムを知れば迷うことなく人々はより集約的なシステムに移行するだろう。ボズ

ラップは、より集約的な土地利用形態に移行(森林休耕から藪地休耕へまたは乾地農法から灌漑農法へ)し、農法や用具を変える場合、一人・一時間あたりの産出高が増加するか否かを検討する。その結果、減少すると結論し、耕作者がより集約的な土地利用システムへと移行するのは、一定の人口密度(移行しなければならないような、または移行した方が有利だと思われるような)に到達した場合のみとする。そして、集約農業には労働時間の延長や多くの投資の必要性、苦役が伴うことを示す。

「人びとはより集約的な土地利用の方法があることにおそらく気づいているであろうし、また原始的なものより一歩進んだ用具に接触しているかもしれない。それにもかかわらず、やむを得ず一人・一時間当り産出高の減少を受け入れなければならないような点に人口規模が到達するまでは、そのような方法を用いようとしてもしないであろう」(p.55)

次の土地利用システムに移行するとしても、一斉的に移行するわけではない。ボズラップは人口減少・停滞、個別地域の自然条件の差異への適用などが原因で、システムが停滞・後退する場合もあり、同一村落、同一地域の異なる諸村落の中に長期間古いシステムと新しいシステムが共存していた場合もあると考える。

原因か結果か

「人口趨勢の変化が、農業方式における変化の原因であるか、また結果であるかということ、歴史研究を通じて決定することがしばしば困難であるし、また不可能である。歴史資料から明確な答えをえられぬため、歴史家の多くは、マルサス理論に従って因果関係を推定しがちである。つまり農業変化が原因であり、長期人口趨勢は結果であるということになる。」(p.192)

我々はときに、「生産技術が発展し生産力と人口扶養力が高まり初めて人口が増加する」という一連の思考を、何の疑問も無く了解する。考古学(特に先史)は、時間の目盛りが文献史学と比べるとどうしても粗い。従って、人口動態が土地利用システム・食糧生産技術発展の原因か結果かは分かりづらい。しかしこの本を読めば少なくとも、食糧生産技術の発展が人口増加の原因であるという伝統的思考や、静的な土地利用形態観、集約農耕が粗放農耕より優れているという価値観を相対化出来るだろう。また、縄文農耕から農耕文化の変遷をダイナミックに描くための理論的な一助にもなるだろう。紹介が前半部分に偏ってしまったが、本書は、後半を中心に端々で近代ヨーロッパ人の粗放農耕への不理解を批判しており、全体を通じて、オリエンタリズム批判や文明批判的な観点からも読むことが出来る。

最後に。日本に集約農耕が浸透したとされる時代に関して、私は時々こう思う。小人口・低人口密度の地域の人々は、果たして水稻農耕のような集約的土地利用システムに魅力を感じたのだろうか…と。

アルカ通信 No.239

発行日 2023年8月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp